

いまでもはっきりおぼえている。
一七歳のとき、舗装道路に犬の糞があって、
それを見たとき、とつぜん悟ったんだ。
そうだ、人生とはこういうものなのだ。

(フランス・ペーコン)

人生はクソである。人糞じゃない、犬の糞だ。水洗便所できれいさっぱりとながされることなんてなく、道端にコロッコロしていて、ただただ侮蔑の目でみられるようなあのクソである。この物語は、そんなクソたちによる、クソたちのための、クソつたれの人生だ。コロッコロしように、クソくらえ。さあ、はじめよう。

*

ときは一九二三年九月一日、いまからおよそ一〇〇年まえのことだ。福島県のある農村に、玉岩興行という一座がやってきた。村には見世物小屋がたてられて、村人たちはおおはしゃぎだ。すげえもんがみられるぞお。そんなうわさをききつけて、トモヨは赤ん坊をしょったまま、フラフラとその小屋までやってきた。

ちかづいただけでも、熱気がつたわってくる。なかからは、きいたこともないような怒号がとびかかっていて、それにあわせて拍手と歓声がわいていた。なんだあ、なにがおこつてんだあ。みたいけど、カネがなくて入場料をはらえない。みたい、でもみられない。み

たい、でもみられない。ああ、みてえ、みてえ。どうしてもみたかったトモヨは、小屋のすきまからソツとなかをぬすみみた。

はつけよおーい、のこった、のこった、のこった！

行司が掛け声をとばすと、パンパーンツと女と女が体をぶつけあった。白い襦袢に白いパンツ、そこにまわしをしめた女たちが相撲をとっている。おふぎけじゃない。マジである。怪物みたいにでっかい女力士と、みめうるわしい、ひきしまった体の女力士が、ウラーとおたけびをあげながらとつくみあいをしている。

でっかいほうの力士が、ちっこいほうをブンブンと投げとばそうとするが、ちっこいほうがなんとかもちこたえる。ド迫力だ。いけ、いけ、いけー。見物人が、おもわず声をあげた。こんどは、ちっこいほうがでっかいほうをもちあげる。ドスコイツ、ドスコイツ。デーんツ!!! 巨体を土俵の外までぶっとばした。

うわあああ!!! 上げえつ、上げえよう。あまりのすさまじさに、トモヨは目をうばわれてしまった。その後も、つぎつぎと熱戦がくりひろげられた。でも、ある力士が相手力士にズドーンツと、おもいきりツツパリをくらわせたときのことだ。ビリビリ、ビリッ。あまりのいきおいに、相手の襦袢がさけてしまった。エロいだべ。すると、なかにいた巡查

がとつぜん大声でさけびはじめた。

中止いーっ！ 中止だーっ！ 中止いーっ！ 解散！

風紀をみだすからやめろ、というのである。ちくしょう、真剣勝負をジャマしやがって。いつの時代もフアック・ザ・ポリス。そうおもった瞬間のことだ。さっきまで、あんなにやかましかったセミがとつぜん鳴きやんだ。ド、ドドドドドツ、グラグラグラ、グラッ。うひゃあ!!! トモヨがさけぶ。木々の鳥たちも、いつせいにまいあがった。力士たちも土俵にはいつくばり、行司も親方も控えの力士たちも、いつせいにしゃがみこんだ。ギヤアギヤアツ、ワアワアツ。見物人も巡查もテンヤワンヤのおおさわぎだ。午前一一時五八分。そう、関東大震災だ。

この日、相模湾沖を震源地とする大震災は、関東一円にむちゃくちゃな被害をもたらし、被災者は一九〇万人、死者と行方不明者は一〇万五千人にもおよんだ。トモヨがいた福島でも関東みたいな被害はなかったものの、震度五弱のゆれがあったくらいだ。ああ、びつくらこいたあ。さすがに興行は中止になったので、トモヨは家路についたが、なんだか脳天がぶちぬかれたような気分だ。

それまでトモヨは、力つてのは男の特権だとおもいこんでいた。いばりくさった男ども

が、女をしたがわせるために殴るける、そうやってつかうもんだと。おっかねえ。でも、きょうみた女力士たちは、ぜんぜんちがう。女が圧倒的なつよさをほこっていて、しかもそのつよさをぶつけあい、力を高めあうことがたのしくて、たのしくてしかたがない様子だった。ああ、女だってあんなふうになれるんだ、なっていいんだ。そうおもっていたら、おいうちをかけるかのように、あの大地震である。そりゃ脳天、パンパーンッつてなっちゃう。で、おもうのだ。おらの人生って、いったいなんなんだべ？

トモヨは一七歳。一〇コウエのネエちゃんがいたのだが、嫁ぎ先で子どもを産んだあと、体をこわして死んじまった。じゃあ、おめえがかわりにいけよつてことで、トモヨが後妻にはいった。旦那の定生は、四〇にちかいおっさんで、まずしい農家の一人息子。どんなやつかというと、クソやろうだ。

世間体がよくて、はたらきものなので、近所の人たちからは評判がいいのだが、家にかえれば人格が変わる。メシがまずい、子どもが泣いている、どこそこが汚れている、おめえのしんきくせえ顔が気に入らねえ。むしろくしゃしたら、なんでも理由をつけてトモヨをぶつたたいだ。ううつ、こいつ、死ねばいいのに。トモヨはいつもそうおもっているのだが、いざ暴力をふるわれると身がすくみ、定生にしたがつてしまう。

ケガをすると、同居していた姑がやさしく手当てをしてくれるのだが、そのたびにこういつてくる。しかたねえんだよう、それがオナゴつてもんなんだあ。そうやって男にした

がわなげりや、食つでいけねえんだよと。しかも、そのあときまつてこういうのだ。このことは近所のひとにいつちやなんねえよ。家の恥だからねえと。

いやいや、恥ならただせよつてとこだが、そうはならない。どこの家でも女はつらいおもいをしてたえているんだから、てめえだけピイピイわめくんじゃないよということだ。いつていることはクソババアなのだが、でも、みんながそうしている、みんなが、みんながといわれていると、なんだか自分もそうしなきゃいけないかのようにおもわされてしまう。よつ、世間体！

でも、もうちがうぞ。だって、女相撲をみたんだから。なんだかきょうはいける気がする。そうおもつて帰宅してみると、定生が仁王立ちして、ジイッとこつちをにらみつけている。目でもわるいんだべか？

油なんか売つてねえて！ちゃんとはたらけつ！

そうどなると定生はトモヨの顔をデシツ、デシツとぶつたたいだ。顔がパンパンにはれるまで、なんどもなんどもぶつたたいだ。トモヨはジツとたえている。しかしいままでのように、ただ身をすくめていたわけじゃない。トモヨは無言のまま、右手をギュツとにぎりしめ、心のなかで呪文のようになりかえした。クッだべ、こいつ。クッだべ、この家。

クソだべ、この村。クソだべ、この世界。クソだべ、クソだべ、クソだべ！
 もう、がまんがならねえ。夜明けまえ、家のもんがねているのを確認すると、トモヨは身ひとつでとびだした。夜逃げである。うしろを気にしながら、山村の農道をダッシュする。逃げろ、逃げろ、逃げろ。めざすさきは、ただひとつ。女相撲の玉岩興行だ。

おねげえします、おねげえしますっ！

ワラにもすがるおもいで、バシバシと門をぶったたいた。するとなんだ、なんだと、目をこすりながら、親方の岩木がやってきた。トモヨは、あたまをさげて岩木におねがいをした。おらを一座にくわえてくだせえ、力士になりてえんだ、力士になりてえんだ、なんだってしますからと。うーん、どうしたもんかとおもって、岩木がポリポリとあたまを掻いていると、うしろから、なんだい、なんだいと、大関の玉椿がやってきた。

きのう興行で巨体の女力士をぶん投げていたひとだ。この一座じゃ、親方の岩木とつれあい、力士たちのまとめ役もしている。目を真っ赤にしながら懇願しているトモヨのすがたをみて、玉椿はかわいそうだとおもったのだろう。さそいこむように、トモヨにむかってこうたずねた。「あんた、どうして力士になりたいんだい？」。即答だ。「おら、つよぐなりでえ！」。こうして、トモヨは玉岩興行の力士になった。

*

数週間後、早朝の相撲小屋。トモヨが息をきらせ、汗だくになっていた。ほかに、大銀杏というマゲをゆい、半袖シャツに短パン姿、そこにまわしをしめた女力士たちが朝稽古をやっている。女相撲の稽古は、朝がはやい。早朝五時から、それこそ死にも狂いの稽古である。中央の土俵では、順々に、デーント、デーントと力士たちが、ぶつかりあっていた。新人力士の花菊こと、トモヨは梅の里にぶつかっていった。まえにトモヨがみた巨体の力士だ。玉岩興行では、玉椿とおなじく大関の位にある。

はあはあ、やああああ！

そうさげびながら、花菊が梅の里にとっしんしていく。

せいー！

一瞬にして、ぶん投げられた。コロッコロころがる花菊。でも、まだ受け身がうまくと

れなくて、背中をうった。いてえよう。背中が泥だらけだ。それをみて、梅の里が花菊を
しかりつけた。

ころがるんだ！ヘソみてころがれ。死ぬぞ。

はい！・・・

さらにぶつかると花菊。でもまたすぐにぶん投げられた。アアア！みちやいらねえと、
玉椿が櫛をとばした。

花菊う！田舎を捨てててきたわりには、なんてざまだ！帰って、百姓やった

ほうがいいんじゃないかつ！

いや！がんばります！

そういうと、花菊はころがるように土俵からおりて、すり足をはじめた。つづいて、日
照山が土俵にさがり、梅の里の胸をかりる。

せー！

こうして朝稽古はつづいていく。がんばれ、花菊。せいやー！

*

さて、女相撲の歴史はふるい。それこそ、古事記や日本書紀にでてくるレベルだ。でも、
見世物として民衆にひろまったのは、江戸中期のことだ。当時は、座頭女相撲といった。
座頭つてのは、目のみえない男のことなのだが、その座頭たち上半身裸の女力士たちと
相撲をとらせるってことをやっていたのだ。女力士のほとんどが、元娼婦だったというの
もあつたんだろう。もじどおりエロ目線の見物人がおおくて、座頭五人に、わかい女力士
をおそわせるみたいなことをやっていたんだそうだ。

もちろん、それだけじゃない。ほんきで体をきたえあげ、女同士でとっくみあいだつて
やっていたし、相撲をとる力士以外にも、大力とって、荷車にのつけた米俵五俵をヒョ
イともちあげてみせたり、あおむけになって腹のうえでモチつきをさせてみせたり、碁盤
を手にもち、それをウチワみたいにあおいでロウソクの火を消してみせたりと、そういう

パフォーマンスをやつて、人気を博していた女芸人もいた。

よしんば、それがエロだつて、やっている本人たちにとつてはどうだつていい。それまで女郎小屋にかこいこまれ、暴力でどどされて、男のおもいがままにあつかわれてきた女たち。ムリやり性的奉仕をさせられて、それがさもいやしいことであるかのようにあつかわれてきた女たち。そんな女たちのなかでも、ひといちばい体がおつきくて、醜いだのなんだのといわれ、コンプレックスをもたされてきた女たち。

そんな女たちが、当時、つよい男の象徴といわれていた力士になって、白昼堂々、素っ裸ですさまじい力をふるつたのだ。しかも、ただ男みたいにつよくなるうとしていたわけじゃない。だつて、大力のパフォーマンスとか、もうすごすぎて、なんのつよさだかわからないのだから。その力、別次元だ。

ふだん、いばりくさつた男たちが、女はよわいんだ、オレたちにしたがうのはあたりまえなんだといつていたんだとしたら、スツとその土俵にのりこんでいって、あつというまにスッテンコロリ。相手のつよさそのものをひっくりかえしちまう。そんなかんじだ。そりゃ、女たちがひきつけられないわけがない。つよくなるのがうれしくて、うれしくてたまらない。おら、すげえ。おら、すげえ。こりゃたまらん。きつとトモヨがひきつけられたのも、そういうことなんだろう。

ちよつと江戸時代のはなしがなくなつちまつたが、こうした女相撲と大力のパフォー

マンスが一本化され、興行としておこなわれるようになったのは、明治時代のことだ。一八八〇年代、石山兵四郎つてひとが山形県の天童市に拠点をおき、全国を巡業して、見世物小屋をたてて女相撲をひろうしてまわつた。それが民衆の熱狂をまきおこし、一大ブームになって、三〇人も力士をかかえるおおきな興行団から、もつとちいさなところまで、二〇以上の団体がうまれたのだ。

ちなみに、明治以降の女力士は、そのほとんどがまずしい農村の出身だった。よくても家のなかにかこいこまれ、亭主や姑にひたすらイビられつづけるか、それとも女工になって体をこわすまでコキつかわれるか、あるいはそれもクビになって酌婦になるか、そんな人生しかみえなかつた田舎の娘たちが、女相撲の興行をみて、こころをおどらせたのだ。あたしも変わりたい、あんなふうになつてみたい。気づけば家をとびだし、興行団にかけこんでいる。脱出だ、この支配からの卒業だ。だれにもしぼられたくないと逃げこんだこの夜に、自由になれた気がした一七の夜。

もちろん警察に搜索ねがいをだされ、とちゅうでとつつかまり、家につれもどされた娘もたくさんいた。でも、それでもあきらめきれず、夜中こつそりと便所の窓から逃げだし、また興行団にかけこんで、またつれもどされて、また逃げて、さいごにはとうとう家のものが根をあげて、力士になることをゆるしたと、そんな娘もいたんだという。田舎の娘たちにとって、女相撲がとんだけ魅力的なもんだったのかがわかるだろう。

